

女性医師の窓

女性医師が働きやすい環境づくりを

石川県石川中央保健福祉センター

伊川 あけみ

5月の連休直後に始まった国内での新型インフルエンザ感染が、6月末には石川県でも発生し、それ以来新型インフルエンザへの対応に明け暮れしております。この原稿が石川医報の「女性医師の窓」に掲載される頃には、PCR検査による全数把握は中止となり、対応は今とは大幅に変わっていることと思います。

私が石川県で衛生行政に加わらせていただきましたのは昭和61年ですので、かれこれ23年が経過いたしました。それまで私は東京女子医科大学付属第二病院(現在、東医療センター)小児科で草川三治先生のご指導で小児循環器の勉強をしておりました。夫が故郷石川に帰ることになり、私は小児科臨床から衛生行政へと大きく舵を切ることとなりました。大学卒業後、大学病院での10年余りの間は本当に忙しい毎日でした。今、臨床の現場におられる先生方は、もっと忙しく厳しい環境の中で過ごされていることと思います。当時の私は通常の当直以外にも重症当直があり、呼び出しがいつあるか分からず、また受け持ちの患者さんがいるのでなかなか休みが取れませんでした。その他、カンファレンスの資料作り、学会発表準備、論文作成等々といつも帰りが遅くなっていました。夫は私以上に忙しいようで、まったく当てになりませんでした。朝、私が子どもたちを自転車に乗せて保育園に連れて行き、午後には家政婦さんに保育園まで迎えに行ってもらい、その後は母にバトンタッチして私が帰るまで子どもたちをみてもらうという生活でした。保育園での遠足などの記念写真にはいつも、私ではなく母が子どもたちと一緒に写っています。「子どもは親の背中を見て育つ。親が精一杯働いていれば、子どもはちゃんと育つ」と自分に言い聞かせてやってきましたが、子どもたちにはずいぶん寂しい思いをさせてしまったと今でも思っています。

世界経済フォーラムが今年も、国別の男女平等のランキング Global Gender Gap Report 2008を発表しました。これは男女間格差を 雇用機会・給与 政治参加 教育機会 健康について指数化したものですが、日本は残念なことに130カ国中98位でした。これからは、女性が社会で活躍するための環境をさらに整え、社会がもっと女性に活動の場を与えて、能力を正當に評価して、性差を超えて優秀な人材を幹部職員として登用していく必要があると思います。このことは日本の医学会においても言えるようです。平成21年4月に発表された「日本医学会分科会における女性医師支援の現況に関する調査報告書」によりますと、医学会分科会の女性医師会員の割合は14.6%、2007年入会の女性医師の割合は23.5%と女性会員が増加傾向にあります。現在、医学部学生の3割以上を女子学生が占めており、女性医師の割合はさらに高くなることが予想されます。そのような中、報告書では、女性の評議員は6.0%、役員は4.3%と、女性の評議員・役員の選任率が極めて低い状況にあるとのこと。さらに、海外留学を専門医・認定医資格更新期間延長の留保条件として認めている学会は84%であるのに対して、妊娠・出産は52%、育児休暇は38%、介護は16%ということであり、女性医師に対する支援体制はまだまだ不備な状況にあると言えます。

本年6月、石川県は県医師会と連携して「女性医師支援センター」を開設し、子育て支援や病院の勤務環境に関する情報提供、女性医師の就業継続や職場復帰を支援していくこととなりました。成果を期待するとともに、女性医師にとって働きやすい環境づくりのために協力していかねばならないと思っております。